種、海洋権といった人類の生存

にとっての原生的かつ根本的な

間の事情を物

たのも、この

語っている。

| | | | | | | | |

はじめたことを知らせている。

エネルギー、

人口、食

強調しはじめ

係の重要性を な相互依存関 きりに国際的

く、七〇年代後半、ひいては二 微しい流動と新しい課題を伴っ び会全体がこれまでに未経験の

> 官が最近、し キー米国務長

一世紀最後の四半世紀に突入し

五年たった一九七四年は、国際 九六九年であった。それから 一家的な審開けをはじめたのは 緊張緩和」の時代へ向って 国際政治が七〇年代前半の として開催されたのは、問題の 所在をいやかうえにも明らかに 外交を主導してきたキッシンジ した。つい先日までは勢力均衡 それにウラジオストクと目、 とでも明らかであった。 ード大統領一行が東京、ソウル ーズ・アップされてきていたこ そのようなときだけに、フォ

韓、ソ三国にわたる歴史上初の "退陣" 直前になってしまった

想されていなかったといってよ は、つい五年前にはほさんど予 治の第一義の課題になろうと

語課題が、 今日のように国際政

ジアから東アジアないしは北東 係、日中、日ソ関係、シベリア アジアに移行しつつあり、それ かで、わが国をとりまくアジア ンドシナ半島を軸とした東南マ 国際政治の焦点がこのところ 情勢を考えてみると、アジアの こうした新しい国際環境のな ム」紙(英)社説が「最近の土 というタイミングについては、 とには意味深長なものがある。 て、去る十一月四日の「タイ いまさらいうまでもないとし 大統領の初めての訪日が、田中 きわめて悪いときにあった。米 ただ、不幸なことにその時期は 北東アジア訪問をおこなったこ

と思えるようになってきた。 に、文字通り右往左往している いたように、いわゆる「緊張緩 しい国際環境の変動のまにま 和」外交の演出者も、いまや新 なる修理工のようにみえる。忙 派な建築家というよりは、たん るだけではないか」と皮肉って れ目が広がらないようにしてい その大構想の基礎づくりは一向 に進まず、ただ補強を加え、割 しく旅を続けてはいるものの、 た民主党の大幅な躍進のなか のシカゴ大学でのキッシンジャ で、大統領はみずから指名した かない。先の中間選挙に示され ら内政的に大きな困難に直面し ていることを忘れるわけにはい フォード政権自身も出発当初か に対処しようとする精力的な姿 ・エネルギー問題に端を発した ー提案にみられるように、資源 勢はうかがえるけれども、当の "先進工業民主主義国"の危機 さしたる関心を示さなかったと されたという点では日米双方に 果的にはソデにしつづけてきた が望んだ汎太平洋外交に米側が 収穫が多かったけれども、日本 日本との関係の重要性が再認識 クソン=キッシンジャー外交が 「緊張緩和」外交のゆえに、結

とも指摘しておかねばなるま そうしたなかで、わが田中政 権は、いま崩壊 しようとしてい

であろう。

われはいま気づかねばならない にもってしまったことに、われ も本来の政治との距離をあまり あるのだが、政治も、政治環境 に見なすことの危険もこの点に

を「民主主義の復元力」と安易

ニクソン退陣や田中『退陣』

味ではなかろうか。

ならないと語っていたことの意 定的な拡大からも擁護されねば いと同時に「民主主義」の無限 政治はファッシズムや左右の独

裁主義から擁護されねばならな

ャンダラスな内政上のつまずき してきた首脳が、いずれもスキ 一緊張緩和」の名のもとに遂行 接近、田中 脳な頂上外交を る。ブラント (日中国交)と韓 ニクソン(米中 (東方外交)、 ってではなく、その巨大な情報 最後にこの政治環境という点

によって潰え去ってゆくその姿 きるが、いま政治を考える場合 に、様々な教訓を得ることがで で指摘していたように、擁護す クが名著「政治の擁護」のなか の政治学者パーナード・クリッ に銘記すべきことは、イギリス リベラリズムの立場に立つ一級 ラルの問題にとどまらず、まさ 合雑誌の手でなされたのかにつ 秋」という、いわば保守主義と 界最大規模のマスコミの手によ れほど題えた日本の、しかも世 おけるアメリカのマスコミをあ に田中金脈政治の追及が、な 深く省みてみる必要があるよう いて、わが国のマスコミ社会も 網とは比ぶべくもない「文芸春 ぜ、ウォーターゲート事件に では、たんに政治家の資質やモ

(東外大財教授



中嶋 嶺雄

あり、本七四年にいずれも国連

し深い溝口を開けていたので

は朝鮮半島の諸問題、

日を超えた人類の重大問題とし

土催の資源会議、海洋法会議、

開発などの問題がにわかにクロ

ッシンジャー米国務長官は、立

明やそれに先立つ十一月十四日

は今後に残されてしまった。ニ エネルギー問題での日米問題整

という問題であり、そのような

べき価値ある本来の政治の復権

な儀式にもかかわらず、資源・ してあるが、 日米友好の象徴的

さて、肝腎の日米会談につい

もとより、今回の日米共同声

題こそ、世界各国の国益や利

これら諸課題の解決と調整の問

しかし、気がついてみると、